



鎮を彩る剡溪の清流

杭州湾の南岸に位置する寧波は、古来、港町として栄えた。遣唐使船が漂着した地としても、日本とのゆかりが深い。

今、寧波は浙江省の海の表玄関、北侖港を擁す港湾都市として、同省の経済を牽引している。溪口鎮は、寧波から奉化市を経て、車で約40分の美しい山すそにある。

溪口鎮を中国全土に、ちよつと大きさに表現すれば世界に知らしめたのは、民国の將領、蒋介石とその息子の蔣経国にちがいない。西洋の東漸で清朝が崩壊していく19世紀末から20世紀にかけての激動期、中国の近現代史に深く関与した蔣父子は、24年の歳月を隔て、この村に生れた。

右・溪南大橋
左・武嶺東路



両蔣の故郷

溪口鎮

蒋介石は激動した民国を強烈な個性で駆けぬけ、敗北して台湾に逃げ込んだ。その父親を補佐して、影のようにつきそった蔣経国。二人あわせて「両蔣」とよぼう。これから、その両蔣の故郷——浙江省の溪口鎮を散策する。

中村達雄 [文・写真]

万5000世帯、4万4000人が居住する江南の小鎮である。溪口散策のハイライトは、村の南辺を護る武嶺門界限だ。剡溪の清流がそれら土色の街区に彩りをそえる。河水で隔てられた風景区をつなぐ溪南大橋が、この小鎮を束ねる扇の要となる。

蒋介石の生家を訪ねる

武嶺西路を西に5分ほど歩いたところにきれいに修復された屋敷があり、その門前に5、6台の人力車が溜まっている。玉泰鹽舖だ。蒋介石は1887(民国前25)年10月31日、この2階で塩商人の父蔣肅庵、三人目の妻王采玉の第1子として誕生した。幼名を周泰、号を瑞元、学齡期には志清と名乗った。国民党史は青年期以降に頻用された「中正」を正式名とし、「介石」は外国人が好んでよんだ名前である。玉泰鹽舖は2階建ての瀟洒な伝統建築で、塩以外に米、酒、石灰などを商っていた。ここは蒋介石が

生まれた翌年に火災で焼失し、一家は近所の豊鎬房に移り住む。現在の建物は、火事の後で再建されたものである。

蒋介石は幼少年期、溪口鎮の私塾で論語、大学、中庸、春秋左氏伝、易経など中国の伝統教育に染まり、16歳のとき、県城の奉化で科挙の受験資格を得るための童試を受けた。翌年には康有為、梁啓超らの変法改良運動からひねり出された洋式教育を受け、英語、数学などの科目を学んでいる。

寧波の龍津中学にあがった蔣は19歳で渡日し軍事留学を志したが叶わず、東京の清華中学でとりあえず日本語を習い、年末にいったん帰国。河北省の保定軍官学堂で留学資格を取り、翌々年の1908年に東京の振武学校に入学しなおした。22歳だった。

1911年、新潟県高田の陸軍野砲連隊で辛亥革命の報に接した蒋介石は、急遽、帰国して孫中山の戦列に加わる。蔣は、このころ、中国国内の拠点を故郷の溪口鎮から上海に移した。

蒋介石は民国の軍事と政治の大権を掌握した後、1949年の台湾逃亡まで前後3回下野している。その度に溪口鎮の自宅にこもり、ここから全国に指示を発していた。

溪口鎮の散策をつづけよう。鹽舖の門前でオート三輪のタクシーを拾い、鎮の西北郊外にある白岩山にむかう。ここは全山が蒋介石の母堂、王采玉の墳墓で、その名を蔣母陵園と称す。牌楼のある入り口から30メートルほど歩を進めた左手に2人の苦力が担ぐ駕籠があり、墓所まで50元で行くという。聞け



上から／玉泰鹽舖、蔣母陵園、豊鎬房

ば、数百段の階段を15分も登るらしい。

慈庵は母親王采玉の没後、蒋介石がその死を悼んで建立した庵である。盛夏の炎熱はこの山に自生する松の林の奥深くまでとはどかず、その清浄な空気感是将領の母堂が永眠する地に相応しい。慈庵からさらに5分ほど登ると墓所があり、孫中山の筆になる「蔣母之墓」の墨跡があざやかである。傍らの亭で汗をぬぐい、墓碑に合掌して下山する。

蔣経国の数奇な半生

蔣母陵園からふたたびオート三輪の客となり、息子の経国が生まれた豊鎬房にむかう。豊鎬房は午前を訪れた武嶺西路の玉泰鹽舖から東に数分歩いたと

1925（民国14）年、16歳の少年だった。

翌年、蒋介石が発動した四・一二上海クーデター（掃共作戦）で第一次国共合作が瓦解した。このあたりを受けて悪化した中ソ関係が原因し、蔣経国はその後の11年間をなかばスターリンの人質としてソ連で抑留生活を強いられる。

西安事変で渋々抗日に動いた蒋介石にスターリンが好感し、経国は1937年、抑留を解かれてウラジオストク、上海経由で溪口鎮に生還した。いわゆる第2次国共合作が経国をソ連から救い出したのだ。ソ連共産党の候補党員だったこともある経国は、豊鎬房の東隣りにあった武嶺学校の図書室で孫中山の三民主義などを読みながら左傾思想を洗浄する。襖を行い、2篇のソ連回想記を執筆して民国政治へのデビューを狙っていた。

西北軍閥の楊虎城將軍と共謀して蒋介石に抗日を迫り、西安事変を発動した張学良は、事件後に特赦を受け、溪口鎮の中国旅行社招待所で軟禁生活を送っていた。同時期、ソ連から生還した蔣経国も、数カ月間、ここに滞在していたので二人は必ず会っているはずだが、両人が書き残した回想録などはその事実には一言もふれていない。西安事変が今もって謎めいている所以の一端をあらわしている。

ソ連回想記を脱稿したのが、豊鎬房と目と鼻の先にある剡溪河畔の文昌閣である。その並びには蒋介石が息子とその嫁、ウラル美人のファイナ（蒋方良）、そして孫のアラン（孝文）のために建てた小洋房の瀟洒なたたずまいが武嶺門の雄姿とともに

ころにある。建築面積1850平米、49室を有する広大な規模を誇るが、これは蒋介石が民国を統一してから拡張されたもので、もちろん経国が生まれた当時の規模を示すものではない。

蔣経国ゆかりの古跡をたずねる前に、数奇な運命に翻弄されたこの人物の半生をおさらいしよう。

蔣経国は1910年4月27日、母毛福梅と蒋介石の長男として生まれた。経国済世の土に成長することを願い、経国と命名された。

幼少期を溪口鎮ですごした経国は、13歳のとき上海の萬竹小学に転校した。浦東中学時代に反帝愛国運動の五・三〇事件にのみこまれ、共産主義に急接近してモスクワ孫逸仙大学に留学する。

に残っている。

溪口散策の最後に、蔣経国の母、毛福梅の墓所にむかう。さきほど通り過ぎた武嶺学校の北100メートルほどのところに摩訶殿とよばれる寺廟があり、毛福梅の墓石はその廟の中心に屹立している。

毛福梅は清国の旧習が蒋介石に押し付けた配偶者だったが、蒋介石の愛情薄く、ほどなく離縁された。福梅は、その後、仏教に帰依して摩訶殿を建立し、ひたすら息子経国の成長を願って暮らした。

1939年、溪口鎮を空襲した日本軍の機銃掃射に遭って福梅は絶命し、悲嘆激昂した蔣経国は「以血洗血」（血で血をあがなう）という四字文をしたため、抗日の決意を新たにす。日本に軍事留学した知日派の父親に比べ、蔣経国の対日感情が厳しかった原因のひとつを形成した事件といえる。

酷似する兩岸の溪

溪口鎮の蔣家古跡が観光資源として脚光を浴びはじめたのは1979年のことだ。その年の元旦、新聞『人民日報』は葉劍英全人代委員長名で「台湾同胞に告ぐる書」を掲載し、中国政府の台湾平和統一に関する方針を海峡の対岸に向けて発信した。

溪口鎮の自然環境は、蒋介石と経国の遺体がホルマリン処理を施されて仮安置されている台湾桃園県郊外の大溪慈湖畔と頭寮の景色に酷似している。大陸に帰ることを願っていた蒋介石が、生前に選んだ永眠の地であろう。■



左手が文昌閣、右手中央寄りが小洋房